

PDF issue: 2025-05-25

# 「舞姫」における異文化としての〈恋愛〉の表現力 法 : 『水沫集』という枠組みを通して

# 武藤, 史子

(Citation)

国文学研究ノート,34:1-11

(Issue Date)

1999-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

https://doi.org/10.24546/81012331

(URL)

https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012331



# 舞姫」における異文化としての〈恋愛〉の表現方法

# I 『水沫集』という枠組みを通して-

# 武 藤

二つの対立概念と捉えることができる。「舞姫」は、こうした 代/前近代〉〈西洋/東洋〉等と言い換えられるが、それらの リスを捨てるという行為を「好色的、非人格的恋愛観に影響さ する解釈に常に二面性を与える結果となる。例えば豊太郎のエ 志向しているとするかによって評価を決めることは、作品に対 二項対立の狭間にあるものとして、位置付けられてきた エリス/功名=人情本=前近代=東洋=豊太郎〉として大きく 中身は相互に関係しており、〈恋愛=浪漫小説=近代=西洋= 替え可能であり、 忍月の言う〈恋愛/功名〉という対立概念は、さまざまに差し なんらかの二項対立を前提として作品を評価することが多い。 「恋愛」か「功名」のどちらをとるかを中心問題としたように た『舞姫』には、鷗外が欲したと思はれる運命悲劇の厳しい 対立する二つの概念の真ん中に作品を置き、どちらの概念を の作品内容を論じる場合、石橋忍月が同時代評で 〈浪漫小説的世界観/人情本的世界観〉〈近

> 統一されることはないのである。 える限り、その解釈は、前近代社会に身を置きながらも近代性 た具合である。「舞姫」を二項対立の狭間にあるものとして捉 いう、同じカードの裏表のような二つの意見に分かれ、決して ながら前近代社会に回帰してしまった作品として批判するかと を志向する作品として評価するか、近代性を獲得する機会を得 ために意図的に書かれたものとして評価する論が出てくるといっ ロッパ近代文化の本質受容の不可能性あるいは絶望を表白する 美は現はれ」ていないと批判する論に対して、同じことを「ヨー

に焦点を絞るのは、 特に〈恋愛〉の描かれ方を中心に比較検討することで、 全な〈近代〉的小説でも〈前近代〉的小説でもないと考えられ と〈近代〉 ては触れられていない。そこで本稿では、作品の内容について、 と「舞姫」との間で、具体的になにがどう違っているかについ ているからだ。しかしそうした解釈には、実際の〈近代小説〉 「舞姫」が二項対立の狭間で評価されるのは、この作品が完 との関わりについて明らかにしてゆきたい。 「舞姫」が〈近代小説〉ではないというと

リスを捨てたとされる行為)が、問題にされることが多いからき、豊太郎とエリスとの〈恋愛〉のありかた(特に豊太郎がエ

代〉の小説とは、具体的に何を指しているのだろう。笹淵友一ところで、殆どの論で、鷗外が目指していたとしている〈近

では、「埋木」といった、鷗外が「舞姫」発表と前後して翻訳、夜」「埋木」といった、鷗外が「舞姫」発表と前後して翻訳、氏は〈近代小説〉の具体例として、「悪因縁」「地震」「ふた

較される〈近代小説〉は、概ね同時期に鷗外が翻訳していた作発表していた作品を挙げている。氏の論文以後、「舞姫」と比べ」「些才」といった「區夕太」象妲」多まと前後して鑑訂

〈近代小説〉について、鷗外自身はどう考えていたのだろう品を想定していると思われることが多い。

鷗外の初期文芸評論が、ハイゼ並びにゴットシャルの文学

か。

依存していることが証明されている。鷗外が翻訳した作品のなが成されており、鷗外の理論が、この二人の文学理論にかなりないので、影響を受けていることについては、既に詳細な研究と

かに、ハイゼが『ドイツ短篇集』に(彼の文学理論に沿って)

れる。一つは、男女が出会い恋に落ちる。その関係は二人の周

翻訳作品で語られている男女の物語は、大きく二つに分けら

較する〈近代小説〉の具体例として、同時期に鷗外が発表した読み込んでいたと推測できる。そこで本稿でも、「舞姫」と比と前後して発表した自分の翻訳作品に、何らかの〈近代〉性を選んだ作品が含まれている。ここから鷗外自身も「舞姫」発表

二五年に発行された『水沫集』に収録されているので「舞姫」

翻訳作品を用いることとする。それらの翻訳作品の殆どは明治

と翻訳作品とを比較するにあたっては、この作品集を基本的な

"場"として設定する。

翻訳作品のなかで〈恋愛〉

がどのよう

の掲載順に並べ、横軸に物語を展開させる要素を並べた。枠の

え、それをどのように自分の作品に取り入れようとしたかを探あてはめて考えることで、鷗外が何を〈近代小説〉としてとらなものとして描かれているかを分析し、その結果を「舞姫」に

翻訳作品にみる〈恋愛〉の表現方法

りたい。

『水沫集』には付録の『於母影』を除いて十七編の翻訳作品 が載っている作品は「ふた夜」「悪因縁」「地震」「うきよ の波」「緑葉歎」「玉を懐いて罪あり」「埋木」「調高矣洋絃 一曲」「折薔薇」の九編ある。これらの作品は、物語の展開の しかたがよく似ており、前提となる恋愛観や、主人公たちのお しかたがよく似ており、前提となる恋愛観や、主人公たちのお しかたがよく似ており、前提となる恋愛観や、主人公たちのお しかたがよく似ており、前提となる恋愛観や、主人公たちのお しかたがよく似ており、前提となる恋愛観や、主人公たちのお

次の頁の表のようになる。表では、縦軸に翻訳作品を『水沫集』するというものである。これを個々の作品に則してまとめると、う一つは、処女と思われる女が結婚せずに男と性交渉を持ちう一つは、処女と思われる女が結婚せずに男と性交渉を持ちれ別れになり、最後には悲劇的結末を迎える、というもの。もし様々な事情から、二人は恋愛を成就させることもないまま別囲からは受け入れられないが、二人の思いはより強まる。しか囲からは受け入れられないが、二人の思いはより強まる。しか

\*\*: こうでの。 在する場合に、それがどのようなものとして描かれているかがなかには、横軸に挙げた要素にあたるものが縦軸の作品中に存

とられない。結局口づけを交わしただけで、伯爵は駅舎を去ったのから「ふ」と思う男であり、テレシナは、人から「愛なくしてなから「ふ」と思う男であり、テレシナは、人から「愛なくしてなから「ふ」と思う男であり、テレシナは、人から「愛なくしてなから「ふ」と思う男であり、テレシナは、人から「愛なくしてなから「ふ」と思う男であり、テレシナは、人から「愛なくしてなから「ふ」と思う男であり、テレシナは、人から「愛なくしてなから「ふ」と思う男であり、テレシナは、人から「愛なくしてなから「ふ」と思う男であり、テレシナは、人から「愛なくしてなから」と思う男であり、テレシナは、人から「愛なくしていられている情報を申し込む。しかしこ人の立場の違いや、原名はいる。舞台は馬を扱う駅をみると、以下のような展開になっている。舞台は馬を扱う駅をみると、以下のような展開になっている。舞台は馬を扱う駅を表して、「ふた夜」に描かれている物語自由恋愛の話型の例として、「ふた夜」に描かれている物語をみると、以下のような展開になっている。

再び駅舎を訪れる。しかしそこにテレシナの姿はなかった。

テレシナの面影を忘れかねていた伯爵は、

戦争の途

4年後、

	\	\	<u></u>	_	主人公二人の関係 恋愛のきっかけ	障害	貞操を破る 男の地位	貞操を破った 男のその後	処女を失った 女のその後	主人公の最後
ふ		た		夜	関係はなし 一目惚れ	身分 女の親の反対				女は不幸のうちに死 に男は変化なし
悪		因		縁	関係はなし 一目惚れ	人種 女の親の反対				女は殺され 男は自殺
地				震	主人の娘と使用人 自然発生的	身分	使用人 (合意の上)	集団リンチ →死	尼になり、後 男と共に死	二人とも殺される
ì	ŧ	ļ	Ø	波	関係はなし 一目惚れ	身分 女が既婚者				女は変化なし 男は女のために死ぬ
緑		葉		歎	関係はなし 一目惚れ	人種				女は他の男と結婚 男は変化なし
玉を	懐	いて	罪あ	5 1)	師の娘と弟子 自然発生的	女の親の反対				障害が取り除かれ 二人は結ばれる
埋				木	(婚約者)		主人公の師	成功	自殺	女は死に 男は落ちぶれる
調高	5矣	:洋;	核-	- 曲			大尉	娘の親に 殺される	尼になる	女は尼になる
折		薔		薇			殿 (領主)	変化なし	自殺	女は自殺

うに頼み、 くなっていたのである。 爵は、その御者に金を託して、テレシナの娘に渡してくれるよ 父に強いられて結婚した相手に苦労させられ、彼女はすでに亡 自分は再び戦場に戻っていく。 御者からテレシナの死を知らされた伯

「ふた夜」の物語は、

主人公の男女が出会い、

障害のある恋

るのは、

処女の、特に肉体を中心にした物語

なのだ。

エンドになったものであり、その点では異質だが、ラストを除 展開の仕方は同じである。「玉を懐いて罪あり」は唯一ハッピー 持っている。「悪因縁」「うきよの波」「緑葉歎」も、 別れ、悲劇的な結末を迎えて終わる、という物語展開を 物語の

けば同じ物語展開を持っている。

·玉を懐いて罪あり」で〈恋愛〉の主体となるのは、

飾り職

0

結婚 デロンが受ける衝撃を思うと告発できない。それどころか口止 は終わる。 人の見習いオリヰエ、と、 ろで真犯人が自首したことにより命を救われる。二人はやがて マ ようとして、 ロンの父カルヂリヤツクの反対により、一度二人は引き離され デロンに知られることを恐れて、身の潔白を証明できないま 解放とが重なっているため、幸福な最後になっているが、 がわりに師の元に戻らされ、再び人を殺そうとする師を止 その後オリヰエ、は、 無実の罪で処罰されかけるオリヰエ、だが、すんでのとこ オリ この物語は 師匠殺しの汚名を着せられてしまう。父親の非道を 今度は師が逆に返り討ちにあって殺される現場に ・井工、の、 「探偵小説」であり、事件解決と主人公 飾り職人としての成功を暗 師が人を殺す現場を目撃するが、 彼の師匠の娘マデロンである。 示して物語 マデ マ 全 め

> otti」というヒロインの名前である。 体として自由恋愛の話型に読み込むことができる 次に処女の話型だが、 戯曲 「折薔薇」の 処女の話型に描 原題は「Emilia かれて

つかぬ台詞によって幕を閉じる。 は天上で神の裁きを受けたいと告げるが、地上で殿を裁けるも ぬそのうちに、花を折」るのである。娘の死に驚く殿に、 うが、殿が手放そうとしないのを知り、娘の願いを受けて、 ていく。それを知った娘の父親が、娘を取り返そうと館 ないので、彼を部下に殺させ、殿はエミリヤを自分の館に連 ようとする。はじめは結婚を遅らせようとするが、伯爵が応じ をガスタルラの殿が見初め、 に手込めにされる前に娘を殺してやる。すなわち「風のちらさ はいない。物語は最後、神に対する殿の、 エミリヤは、 伯爵との結婚を間近にひかえる娘である。 結婚前になんとか自分のものにし 反省とも恨みとも 向

男は、 相手との結婚がかなわないため、尼にさせられる。 なおかつ純潔を守るためには命をもかけねばならないことを語 者については、 ならぬ国王の を勝手に裁いたとして、父も殺されかける。場を収めたのは神 る物語である。「調高矣洋絃一曲」では、処女を奪われた娘は 処女の話型は、美しい乙女が男に狙われやすいものであ 裁判官に任命された娘の父親の裁きで殺されるが、 出現である。 天上で神の裁きを待つという話になっていただ 国王が現れなければこの話· 娘を犯した

ろう。

男が、 男との関係が描かれている。作品全体は、 中に処女の話型の主人公である女と、 語 るうえでのエピソードの一つに組み込まれているため、 埋木」における処女の話型は、 信用していた師に裏切られ、 才能を盗まれ、 主人公である男の身の上を 物語全体の主人公である 無名ながら才能ある 落ちぶれて

0 男には婚約者がいたが、師の勧める仕事のために男が 裏切りの一つとして出てくる。 んばら

路地裏に埋もれて暮らすようになるという話で、

処女の話は師

であることは明らかである。そして、 約者以外の男と、結婚もしていないのに肉体関係を持ったため 云々を正面から問題にしているわけではないが、女の死が、婚 は消えてしまい、女は男と再会したあとすぐに自殺する。 しまう。 離れている間に、その婚約者は、 罰されることもなく、むしろ主人公の才能を盗んで世に しかし女と関係を持ったあと、 男の師と肉体関係を持って 女の処女を奪った当の相 男が戻る前にその師匠 処女

する 女は処刑されかける。そこを地震が襲い、二人はいったん再会 入れられる。その後も二人が密会を続けていたことが発覚し、 が性交渉をもってしまったところから、 えて愛し合い、よって周囲からの強い反対にあう。そして二人 含んでいるところに特殊性がある。 が の作品は、 地震」は、 最後に集団によって私刑にあって殺される。 自由恋愛の話型と処女の話型との両方の要素を 自由恋愛と処女との二つの話型が入り交じって 作品の二人は身分の差を越 女は罰せられ、 尼寺に

> わったことにより、二人は、最もむごたらしく殺される結果と ないものであるのに、そこに未婚で処女を失うという罪が いる。身分を越えた恋愛が、そもそも周囲からは受け入れら る点では特殊だが、それぞれの物語の要素はきちんと描 か

n 7 1,

関係)はすべて、この二つの考えに基づく話型によって語られ みに収められた翻訳作品に描かれた〈恋愛〉 という二種類の考えで成り立っている。 ばならず、仮に犯された場合、その将来は完全に閉ざされる、 いということと、女は結婚するまで死ぬ気で己の貞操を守らね いる物語は、自由恋愛は必ず障害があり、成就しない場合が多 描く物語との二つの話型に括ることができる。そこに描 すれば、自由恋愛について描く物語と、 なったのである。 鷗外の翻訳した作品に描かれた男女の関係は、 処女性の重視について 『水沫集』という枠組 (あるいは男女の 大まかに分 かれ

# 「舞姫」に見る 〈恋愛〉 0) 表現

ているのである。

受け入れられ、出世の道を歩んでゆくのである。

か。 姬 話型と処女の話型とによって語られていた。これに対 は、 水沫集』に収録された翻訳作品の 〈恋愛〉をどのようなものとして描いているのだろう 〈恋愛〉 は、 自 して「舞 由恋愛の

の後、 舞姫」 の物語 肉体関係を含む恋愛が成立 をまとめると、 偶然の (貞操を破る男)し、 出会い 恋愛のきっ

け

なり、 る。 愛の話型と処女の話型との要素が、入り交じる形で描 に終わる(男は変化なし)というものである。ここには自 囲 「舞姫」のなかで、男と女の物語がどのように描かれてい 女が発狂 からの否定 (処女を失った女) して、二人の関 (障害) があって、二人は別れねばならなく 係は悲劇的 品かれてい 1由恋

らなくなり、最後には悲劇的結末を迎える。 **[からは否定される。様々な事情から二人は分かれなければな** 人種の差を越えて二人は愛し合うが、それは恋人たちの周 舞姫」における自由恋愛の話型に破綻はほとんどない。 身

るかを、先にみた翻訳作品の内容と比較しつつ見ていきたい。

は

いるが直接の原因ではない

方「舞姫」では、エリスが豊太郎が彼女を捨てたと思っ

るが、 おける〈恋愛〉 のあり方は、 破綻として受け取られてきた。しかし前述のような物語 捨てたことが、「舞姫」において西洋の これまでの研究では、豊太郎が出世のためにエリスとの恋を その中には、 翻訳作品における自由恋愛が成就しない理由には色々あ 翻訳作品におけるそれと同じである。 ŧ 悲劇的な結末を迎えるものとして描かれて 男が女のもとを離れる物語も含まれている 〈恋愛〉を描く上での 翻訳作品に この展開

そのものは、翻訳作品にも描かれており、その際

ことになったのである。

しかし周囲の反対によって

〈恋愛〉をあきらめるという行

<del>--</del> 6 --

〈恋愛〉

劇が導き出される話としては、「ふた夜」と「緑葉歎」とが 八が付 原因に の原因 いた男の気持ちに反して、女がすでに結婚していたこと は、 なっている訳ではない。「緑葉歎」 ただし、これらの作品は、男の行為が直接女の悲劇 別れたあと久しぶりに女に再会して、焼け棒杭に における悲劇 0 直

恋愛の成就がないまま男が女のもとを去り、それによって悲

0

ちらも自由恋愛が選ばれなかったことは、悲劇の遠因になって 訪ねたときには、彼女は死んでいるのである。このように、 にも夫に苦労させられたために、かつて心を交わした男が である。「ふた夜」では、女が互いに引かれあった相手とでは 親の決めた相手と結婚したことが原因となった。 سل

なく、

非常な重みを持つこととなった。その結果、まるでそれこそが 愛を捨てたという、 来物語を悲劇に導くための要因にすぎなかったはずの、 ことが、直接エリス発狂の引き金となっている。このため、 〈恋愛〉と対立するものであるかのような読み取り方が現 いわば物語のなかのエピソードの一つ が恋

状況であって、 この作品で男は、誤解から女を殺してしまうが、ここでも本質 的な悲劇の原因は、 いう一つの行為ではない。 立するのは、あくまで二人を取り巻く環境であって、 描 .接悲劇の引き金となっている物語として「悪因縁」が かれ方に力点があると考えれば、「舞姫」 男の行為ではない。二人の関係を取り巻く環境 男が誤解せざるをえなくなるような周 例えば別離ではないが、 を自由恋愛 男の 别 れると あ の

直

型

翻訳

0

なく同棲し、 話型についてである。豊太郎とエリスは、正式に結婚すること 子供までもうけている。翻訳作品における処女の

話型では、このような物語展開はありえなかった。

婚を迫るというのは、処女の話型としては異常である。 在しない。結婚もせずに同棲し、子供が出来てからようやく結 あったとしても、翻訳作品の世界に、婚前交渉という考えは存 しれない不安定なものとして認識している。仮に結婚の約束が 言葉にもうかがえる。二人の関係をエリスは、 富貴になり玉ふ日はありとも、われをば見棄て玉はじ」という を絶対的な前提としたものでなかったことは、エリスの が出来るまで結婚を言いだすこともない。二人の同棲が、 らず「舞姫」のエリスは、ごく自然に同棲関係を受入れ、 なければ、必ず罰としてそれなりの処分を受ける。 特に女性は、重い罪を犯したものとされ、男と正式に結婚でき 『訳作品の中で、正式な結びつきでなく貞操を犯した男女、 捨てられるかも にもかかわ 「縦令

ている。 迫る母は「悪因縁」にも描かれているが、そこでは実際の性交 「若しこれさへ許すことあらば、直に殺さむ」と脅しまでかけ の描き方も、 が、その態度も話型から外れている。娘に売春めいた行為を 決してしてはならないものとされている。 娘に積極的に売春を迫り、男との同棲を許すような周 翻 訳作品における処女の話型には当てはまるも 母親は娘に対し

本来ならエリスを罰すべき周囲、この場合は彼女の母親であ

置

一いて日本に帰ったこととを区別して答えている。

|女の描き方について、石橋忍月との論争のなかで鷗外自身

0

うに述べている も触れている。 「舞姫」の処女の扱いについて、 忍月は次のよ

のと謂はざる可からず 東するの一事は人物と境遇と行為との関係支離滅裂なるも すにあらざる以上は太田の行為-リヒカイト」の尊重すべきを知る者なり、果して然らば 人物の性質を見るに小心翼々たる者なり、「ユングフロイ 彼を狂乱せしめ終に彼をして精神的に殺したり而して今其 を断てり、無辜の舞姫に残忍過酷を加へたり、 「真心の行為は性質の反証なり」と云へる確信を虚妄とな 今本編の主人公太田なるものは可 ――即ちエリスを棄てて帰 '憐の舞姫と恩愛の情! 彼を玩弄し

性質が弱いというのはおかしい、ということである。 して鷗外は、豊太郎がエリスと関係を持ったことと、 (あるいはその処女をもらった相手を)功名心から捨てた男の これに対 エリスを

忍月の提起した問題は、疑似結婚生活のような同棲関

の境遇に驅らる、状を解せざる言のみ。 したる昔の心に負きしはこ、なりといはヾ、 スを棄てたるは、エリスが狂する前に在りて、 て去る心とは、何故に両立すべからざるか。若太田がエリ 不治の精神病に係りし女を其母に委託し、 なりたる脳髄に帰せしなり。(中略)処女を敬する心と、 るを、これをおのれが悲痛、感慨の刺激によりて常ならず 太田生はエリスが「ユングフロイリヒカイト」を傷けた (中略) 存活の資を残し 是れ弱性の人 其処女を敬 太田が処

係

ふべからず。 女を敬せし心と、其帰東の心とは、 其両立すべきことを疑

物

た内容と同じである。 に断」とか「親愛なる情婦を気死して名誉の奴隷となる」といっ 数年の親しみを断ち、但し正義の為に断に非ず黄金虚栄の為め とは、処女を犯すなということではなく、処女をくれた女を捨 てるなということだ。この論調は、他の同時代評の「斯て彼は 忍月が「ユングフロイリヒカイト」を「尊重」するというこ

認識は、翻訳作品に描かれた〈恋愛〉に通じるものである。 が問題だということと、自由恋愛は周囲から反対されるという ようとしていただけだと答えている。処女は犯されるかどうか 持っているが、そのことと捨てるということがつながっていな そしてエリスを捨てたのは、彼女が正気を失ってからであ 『外の回答を見ると、処女を「犯した」ことには問題意識 彼女が発狂するまでは、周囲の反対によって別れさせられ 9 を

ろうか。

まり鷗外は、意識して同時代的な認識から離れ、自己の理論の

うなものとして描かれているかを、かなり正確に把握していた 品により近いものだった。そして彼は、「舞姫」における処女 自分自身でも認めている。翻訳作品のなかで〈恋愛〉がどのよ 立脚点として、翻訳の理論を用いようとしていたのである。 表現が、翻訳作品の話型と完全には一致していないことを、 『外の処女に関する認識は、忍月の認識と比べれば、翻訳作 「舞姫」を書くにあたって、どうしてその話型を崩

たのだろうか。

処女喪失に対する罰を、彼女はこの時点で受けるのである。そ の意思がないと思ったエリスは発狂する。処女の話型のなかの、 自由恋愛の話型にあるように周囲の反対にあい、豊太郎に結婚 成立に処女の話型の処女喪失とが重なる。その後二人の関係は すると、 語を展開させる要素に注意して、もう一度この作品を分析 自由恋愛の話型における出会いによって始まり、

て違うものになっているのも、ここに原因があるのではないだ の話型を中心に展開している。処女の扱いが、翻訳作品と比べ き込まれていることが分かる。ただしその書き方は、自由恋愛 較すると、ここには自由恋愛と処女と、両方の話型の要素が書 なって、豊太郎の帰国により、物語は幕を閉じる。先の表と比 してそれが、自由恋愛の話型でいう関係が成就しないことと重

る。 は助かり、男と再会するが、最後は二人とも民衆に殴り殺され び発覚、女の処刑が決まる。偶然の地震によって女はいったん れる。二人の関係はその後も続き、女の妊娠によって関係が再 語が展開する。身分違いの男との性交渉が発覚し、女は尼にさ 共通点を書き込んでいるこの作品は、どちらの話型も破綻なく 震」だが、この作品は「舞姫」とは逆に処女の話型を中心に物 翻訳作品のなかで、二つの話型が書き込まれているのは 処女の話型を中心として、その要素に自由恋愛の話型との 地

との両方の話型によって描かれている。 舞姫」の 〈恋愛〉 は、 翻訳作品と同じく、 ただ自由恋愛の話型を 自由恋愛と処女

描

かれている。

である。 物語の中心に据えたことにより、処女の話型に歪みが生じたの

おわりに

ることなく終わったのだ。 翻訳作品と同じ受け止め方をしていたからこそ、それは成就す 置かれた状況に左右されたからではない。 なかったのは、 ていることが確かめられた。豊太郎とエリスとの関係が成就し 翻訳作品と同じく、自由恋愛と処女との話型によって表現され されている翻訳作品と比較することで、「舞姫」の なかで捕らえられがちな作品だった。しかし『水沫集』に収録 舞姫 はこれまで 前近代的思想による限界や、当時の明治政府の 〈恋愛〉か 〈功名〉かという二項対立 〈恋愛〉について、 〈恋愛〉が の

比較にこだわったからである。
た。これは作品の分析方法として、あくまで実作の表現上でのを、自由恋愛の話型に処女の話型が混入しているためと仮定し語られているわけではない。本稿では、「舞姫」の話型の崩れ

らかにすることで、当時の鷗外が〈文学〉をどのような形で表そこには鷗外独自の作為が加わっている。その作為の過程を明を当てて分析した。鷗外がそれを自分の作品に移入する上で、いたかについて、翻訳作品における〈恋愛〉の表現方法に焦点画外が、西洋の〈文学〉をどのようなものとして受け止めて

相違点を明らかこした。今後は、鳴外の切明三部乍全本を2年本稿では、話型を通して、翻訳作品と「舞姫」との共通5現しようとしていたのか、よりはっきりさせていきたい。

どう表現しようとしていたのかについて考えたいのである。的な面から文学に対する認識を探ることで、鷗外が〈文学〉を的な面から文学に対する要請の影響を挙げることができる。理論日本の、文学に対する要請の影響を挙げることができる。側写解明の手掛かりとして、鷗外の初期文芸理論にみられる、側写解明の手掛かりとして、鷗外の初期文芸理論にみられる、側写解明の手掛かりとして、鷗外の初期三部作全体を翻訳相違点を明らかにした。今後は、鷗外の初期三部作全体を翻訳

註

- (1) 「舞姫」 (『国民之友』明治二三年二月三日)
- (2)笹淵友一「森鷗外-自我の覚醒とエキゾティシズム--」

『浪漫主義文学の誕生』明治書院、昭和三三年一月

- 森鷗外論究−』大東出版社、平成三年一一月(4)金子幸代「ドイツ三部作の中の女性像」『鷗外と〈女性〉−(4)矢部彰「『舞姫』考」『文芸と批判』昭和六三年一○月
- (5) 註(2) に同じ
- (6) 註(3) に同じ
- れ自体が、二分化された解釈を一元化、あるいは統一す和六三年四月)一八五頁で「このテクストの書かれ方そして小森陽一氏は『文体としての物語』(筑摩書房、昭(7)「舞姫」の解釈が二つの正反対な結論に別れることに対

る機能をもちあわせていない」と述べている。

8 描かれているが、「舞姫」にはそれがなく、より「人情 (2) に同じ。 笹淵氏は、翻訳作品には「真の愛」が

本」的であると批判している。

9 平岡敏夫「『舞姫』成立前後」『日本文学』昭和五五年 二月(翻訳作品との比較から、当時の鷗外がおかれてい

青田寿美「森鷗外の初期文学-ドイツ短編小説理論とク た状況に対する、鷗外自身の意図を読み取っている)

の順である。

残る豊太郎の姿を「鷗外が現在取るべき姿勢、もしくは (翻訳作品のなかでもクライストの作品との相違に注目 翻訳作品同様に狂うエリスに対して「現実世界」に

ライスト受容を通して-」『国語国文』平成二年七月

 $\widehat{10}$ 小堀桂一郎『若き日の森鷗外』東大出版会、 運命に対する眼差」の表出としている) 昭和四四年

11 松木博氏は、「『水沫集』の構成をめぐって-ハイゼの 月)で、『水沫集』全体をハイゼの理論にあてはめて論 小説を軸として-」(『日本近代文学』昭和五七年一〇

 $\widehat{12}$ 当時の表題は『美奈和集』だった。その後明治三五年に 改訂版が『水沫集』の題名で出版され、以後この表記が

じている。

13 初出は「調高矣洋絃一曲」『読売新聞』明治二二年一月 いているので、本稿でも以下『水沫集』と表記する。

三日~二月一四日「緑葉歎」同二月二二日「玉を懐いて

~七月「埋木」『柵草紙』同年四月~明治二五年四月 年三月一七日~二六日「悪因縁」『国民之友』同年四 同年一〇月~明治二三年六月「ふた夜」『読売新聞』明 罪あり」同三月五日~七月二一日「折薔薇」『柵草紙』 治二三年一月一日~二月二六日「地震」『国民新聞』同 「うきよの波」 『国民之友』明治二三年八月~一一月、

14 た作品集『塵泥』が出た後の大正五年にも『水沫集』の ていたのである。大正四年に初期の創作作品だけを集め これらの作品は、当時の読者に対して区別なく提示され 『水沫集』の収録方法に、創作と翻訳との区別はない。

<u>15</u> 八二頁。鷗外の文章は、以下この全集から引用する。 『鷗外全集第一巻』 かに長く持続されていたかがここに伺える (岩波書店、昭和六一年一二月) 三

縮刷版が発行されている。『水沫集』という枠組みが、

 $\widehat{16}$ 同前書三九三頁

18 <u>17</u> して書いている。 『改訂水沫集』の序文に、鷗外自身がこの作品の解説と 『鷗外全集第一巻』三一四頁

20 同前書四七六頁

19

『鷗外全集第一巻』四三八頁

 $\widehat{21}$ (1) に同じ

 $\widehat{22}$ 「舞姫に就きて気取半之丞に与ふる書」『鷗外全集第二

二卷』一六二頁

23 巖本善治「国民之友新年付録」(『女学雑誌』明治二三 年一月)。野口寧斎「舞姫を読みて」(『志がらみ草紙』

明治二三年一月)

(21)笹淵友一「森鷗外-自我の覚醒とエキゾティシズム--」 桐原光明「『舞姫』論考」『「森鷗外」論-知られざる 側面』暁印書館、昭和六一年一一月 『浪漫主義文学の誕生』明治書院、昭和三三年一月

<u>25</u>

(本学大学院修士課程)

—11—